

『万葉集』の歌における男性から女性に対しての敬語

——中臣宅守の歌における敬語の位置づけについて——

田 野 順 也

一

『万葉集』には約四五〇〇首の歌が収められて、約十パーセントの歌に敬語が用いられている。敬語の用いられている歌のうち、約十七パーセントの歌（七三首）に、男性から女性に対しての敬語がみられる。男性から女性に対しての敬語は、男性、あるいは女性から男性に対して用いられた敬語よりも少ない。そのため、これらをどのように位置づけるかが問題となる。

本稿では、『万葉集』巻十五の後半に位置する、「中臣朝臣宅守与狭野弟上娘子贈答歌」（15・三七二三～三七八五番歌）にみえる中臣宅守の歌に用いられた敬語が、男性から女性に対しての敬語の中にどのように位置づけられるかについて述べていきたい。この敬語をとりあげるのには、先行研究において、敬語の用いられた理由が多

『万葉集』の歌における男性から女性に対しての敬語

く示されていて、まだ問題を残していると考えられるからである。

なお『万葉集』の引用については、小島憲之氏・木下正俊氏・佐竹昭広氏校注・訳『日本古典文学全集 万葉集』（小学館）によった。また「」は原文表記を示している。

二

対象となる「中臣朝臣宅守与狭野弟上娘子贈答歌」について述べておく。

『万葉集』の本文の題詞には、

中臣朝臣宅守与狭野弟上娘子贈答歌

としか述べられていないので、歌のよまれた詳しい事情は分からない。しかしこの部分に対応する、『万葉集』巻十五の目録によると、

中臣朝臣宅守娶蔵部女孀狭野弟上娘子之時、勅断流罪配越前国

一

也。於是夫婦相嘆易別難会、各陳慟情、贈答歌六十三首

とある。つまり中臣宅守が狭野弟上娘子を妻にした時、彼が罪を得て、越前国に流されることになり、その時に、二人がやりとりした歌ということである。中臣宅守は『続日本紀』によると、天平十二(七四〇)年六月十五日の大赦の際に、彼ら六人が「赦の限に在らず」とされたことが分かる。この時の歌とされるのが、

帰り来る 人來れりと 言ひしかば ほとほと死にき 君かとおむひて (15・三七七二、狭野弟上娘子)

である。このことから歌群は天平十二年前後の時期の歌を取めていると考えることができる。それ以上のことは歌の内容から推測していくしかないもので、はっきりしたことは分からない。二人はこの時期に、中臣宅守が四十首、狭野弟上娘子が二十三首の歌を詠んでいる。中臣宅守はこのうち、四首の歌に敬語を用いている。

まず検討の対象となる中臣宅守の敬語を用いた歌をあげておく。

A 遠くあれば 一日一夜も 思はずて あるらむものと 思ほしめすな「於毛保之売須奈」 (15・三七三六)

B 山川を 中に隔りて 遠くとも 心を近く 思ほせ我妹「於毛保世和伎母」 (15・三七六四)

C まそ鏡 かけて俣へと まつり出す「麻都里太須」 形見のもの (15・三七六五)

D 愛しと 思ひし思はば 下紐に 結び付け持ちて 止まず俣はせ「夜麻受之努波世」 (15・三七六六)

A から D のうち、特に A の第五句に問題がある。「思ほしめす」という二重敬語は、皇子や天皇に用いられていて、^① A の歌と似た例がない。したがって A は特殊な用例ということになる。

A の「思ほしめす」についての早い時期の評価として、武田祐吉氏『萬葉集全註釈』や窪田空穂氏『萬葉集評釈』のものがある。両者とも敬語が使用されていることを、「五句に敬語を使用してゐるのは、却つてよそくしい。内容も愚痴つばく、めそめそしてゐる」(武田祐吉氏『萬葉集全註釈』)、「結句の敬語も鄭重に過ぎる」(窪田空穂氏『萬葉集評釈』)と否定的にとらえている。敬語が用いられた理由については、武田祐吉氏『萬葉集全註釈』には特に述べられていない。一方窪田空穂氏『萬葉集評釈』には、「女性に対しての慣用」とある。

次に歌自体の問題ではなく、編纂上の問題であるとする説がある。『萬葉集全注 卷第十五』(吉井巖氏)では、A の歌を含む「中臣朝臣宅守与狭野弟上娘子贈答歌」の資料は「娘子のメモに基いたもの」とする藤原芳男氏の説をふまえながら、「かかる作(15・三七三六番歌―筆者注)を含んでいるという無頓着さは、編集以前に、さまざまの場での作が、宅守と娘子の物語に入りこんでいた、とい

う可能性を推定させる」と述べている。

また歌の音数律から説明する考え方がある。これは、金田一京助氏「萬葉集の敬語」以来の考え方である。金田一氏は次のように述べている。

（歌における―筆者注）五七五七七といふ定まりは、一字くらゐ多いからとて、少ないからとて、大して構はなかつたもので、現に五文字が、四文字だつたり、六文字だつたり、可なりに破つてゐる。だから敬語にしようといふ意識さへ強いければ、できるのにしないのは、どういふわけか。

歌だから、失敬にはならず、それで許されるといふのは、どうしても、なにか、歌といふものの本質に関する問題があるのではあるまいか。それとも、敬語そのものの歴史に関する問題であるのか。今日までこの問題は未決にあるやうである。^③

この説は、『新編日本古典文学全集 萬葉集』（小学館）が採用している。『新編日本古典文学全集 萬葉集』（小学館）では、Aの歌の「思ほしめす」について、「音数の事情もあるうが、異例の敬語使用と言つてよい」と、特殊であることを認めながら、音数律が関係していることを述べている。^④

以上のようなみかたに対して、新たな説を出されたのが伊藤博氏である。伊藤氏は、『萬葉集』の歌では男性から女性に対して敬語

『萬葉集』の歌における男性から女性に対しての敬語

を使うことが少ないことを確認している。^⑤その中で中臣宅守が女性に対して敬語を多く用いていることに注目する。中臣宅守は「自己凝視、自己認識の力量が格別に豊富で、知性・ゆとり・教養の度が高く、事態を客観視し存在を内省することのできる冷静な男性」であると述べて、「狭野弟上娘子を限りなくいとおしむが故に、あやすかのように相手を持ち上げ相手の心を安めたもの」と位置づけている。

先行研究において共通するのは、中臣宅守の歌の敬語を特殊なものとして、位置づけようとしている点である。中臣宅守の歌の敬語は、『萬葉集』の歌における敬語からみて、特殊といえるだろうか。確かに「思ほしめす」という敬語の使用は、『萬葉集』全体からみて特殊である。しかしその点を重視しすぎているのではないだろうか。

以上のことから、まず『萬葉集』の歌における男性から女性に対しての敬語を検討し、その結果を五つに分類することを提案する。その上で、中臣宅守の歌の敬語が分類した項目のどれに位置づけられるかを考えたい。

三

『萬葉集』の歌において、男性から女性に対して用いた敬語は大

きく、

(1) 対象が天皇または太上天皇の場合

(2) 対象が死者の場合

(3) 対象が伝説上の人物の場合

(4) 遊戯性のある贈答の場合

(5) 旅の場合

に分けられる。これらの項目に属する典型的な例をそれぞれ考察し、^⑦ていくことにする。

(1) 対象が天皇または太上天皇の場合

E やすみしし 我が大君の 聞こしをす 「所聞食」 天の下に：

(1・三二六、柿本人麻呂)

E は持統天皇の吉野行幸の時に作られた歌である。天皇に対しては、男性女性にかかわらず、敬語を用いている。この項目では、敬語を用いている男性とその対象者との身分の差が関係している。

(2) 対象が死者の場合

F …大鳥の 羽羽の山に 我が恋ふる 妹はいますと 「妹者伊座

等」 人の言へば 岩根さくみて なづみ来し 良げくもそな

き… (2・二二〇、柿本人麻呂)

G 家離り います我妹を 「伊麻須吾妹乎」 留めかね 山隠しつ

れ 心どもなし (3・四七一、大伴家持)

H …家ならば かたちはあらむを 恨めしき 妹の命の 我を

ばも いかにせよとか にほ鳥の 二人並び居 語らひし 心

そむきて 家離りいます 「伊弊社可利伊摩須」

(5・七九四、山上憶良)

F、Gはそれぞれ柿本人麻呂と大伴家持が死んだ自分の妻に対して用いたものである。Hについては諸説あるが、『万葉集全注 巻第五』(井村哲夫氏)にしたがって、大伴旅人の妻の死に関する歌としておく。

FからHの歌の敬語について、澤瀉久孝氏は「妻の死を悲しんだ作のみ」で「たとへ作者の妻であつたとしても、既に故人となつた死者に対する敬意がこの敬語を用ひしめたと考へられ」と述べている。Hの場合は、大伴旅人の妻であるので、自分の妻に用いた例とはいえない。身分の高い人の妻であることが関係している可能性もある。

死者に対して用いた例は、妻の場合だけではない。明日香皇女挽歌(2・一九六、柿本人麻呂)にも用いられている。この場合には、対象が高貴な女性であることもかかわっている。しかし、男性女性の差や身分の差にかかわらず、死者には敬語が用いられているので、先にあげた妻に対して用いた例と同じように扱うことにする。

(3) 対象が伝説上の人物の場合

I…何すとか 身をたな知りて 波の音の さわく湊の 奥つ城
に 妹が臥やせる「妹之臥勢流」…

(9・一八〇七、虫麻呂歌集)

J…家離り 海辺に出で立ち 朝夕に 満ち来る潮の 八重波に
なびく玉藻の 節の間も 惜しき命を 露霜の 過ぎましに
けれ「過麻之尔家礼」… (19・四二二一、大伴家持)

Iは「真間娘子」、Jは「菟原処女」という伝説上の女性の死にか
かわって用いられている。この点から(2)対象が死者の場合と扱
えばいいようにも思える。しかしながら次のような例もある。

K 松浦川 川の瀬光り 鮎釣ると 立たせる妹が「多々勢流伊毛
河」裳の裾濡れぬ (5・八五五、作者未詳)

L 海原の 沖行く舟を 帰れとか 領巾振らしけむ「比礼布良斯
家武」 松浦佐用姫 (5・八七四、作者未詳)

Kの歌は、「遊於松浦河」の中の歌、Lの歌は佐用姫伝説にかかわ
る歌である。Lの歌のほうについては伝説を扱った歌として問題は
ない。Kの歌については少し問題がある。「仙女」ともとれる「釣
魚女子」との歌のやりとりを描いた歌群のなかにある。この歌群は、
『日本古典文学全集 萬葉集』(小学館) などにあるように、虚構で
ある。また漢文の影響、特に「遊仙窟」の影響が指摘されている。⁹⁾

このことから「伝説上の女性」とはいいにくい。しかし「七夕」の

ような明らかに漢文の影響を受けた伝説の歌があることから、それ
に類似するものとして、ここに位置づけることにする。

(4) 遊戯性のある贈答の場合

M我が衣 形見に奉る「形見尔奉」 したたへの 枕を放げず
まきてさ寝ませ「巻而左宿座」 (4・六三六、湯原王)

湯原王の歌のほとんどが「娘子」との贈答である。この「娘子」
は名前が記されていないので、どのような人物なのかは不明である。
この歌も、「娘子」との贈答歌群(4・六三一―六四二番歌)の中
の一首であるが、その「娘子」について、橋本四郎氏は、神田秀夫
氏の「娘子」についての説をふまえて、「娘子」と呼ばれる女性を、
「遊行女婦」と「物語のヒロイン」の二つのグループにまとめるこ
とができるとしている。

橋本氏は無名の「娘子」について、「娘子」が実際には存在しな
い可能性を考えている。「娘子」は宴席の場での誰かであり、その
「娘子」とやりとりされる歌は「遊びとしての恋」の歌であると述
べている。したがって宴席という場で作られる「物語のヒロイン」
としての「娘子」は、「結局は現実の自己との間に遙かな断絶を置
く世界の女性」¹⁰⁾である、としている。

この説に従うと、「娘子」という人物を誰かが演じて、湯原王と
歌のやりとりをする、ということとそこに遊戯性があるということにな

る。

戯奴がため 我が手もすまに 春の野に 抜ける茅花そ 召し
て肥えませ (8・一四六〇、紀女郎)

N我が君に 戯奴は恋ふらし 賜りたる「給有」 茅花を食めど
いや瘦せに痩す (8・一四六二、大伴家持)

この二首の歌は、「茅花」という一つの題材に基づいて行われた贈答である。大伴家持には、紀女郎との歌のやりとりがある(4・七六二～七六四番歌、4・七七五～七八一番歌、8・一四六〇～一四六三番歌)。それらのうち、二つの歌群(4・七七五～七八一番歌、8・一四六〇～一四六三番歌)で敬語を用いて歌を詠んでいる。

この二つの歌群において、大伴家持は、紀女郎に対して「君」(4・七七八番歌)を用いたり、自分のことを「わけ」(4・七八〇番歌)と呼んだりしている。一般に『万葉集』では、「君」という言葉は女性から男性に対して用いられ、男性から女性に対して用いられることは少ない¹²⁾。つまりNの歌はその少ない例の一つとなる。

一方「わけ」という言葉は、「若輩の者を揶揄するという語」(『日本古典文学全集 万葉集』)である。また「敦煌変文」で、口語の「奴」がみえ、一人称の意味で用いられていることが指摘されている¹³⁾。この「奴」の意味で、Nを含む歌群では用いられているとして、

内田賢徳氏は次のように述べている。

実際の待遇的な関係に直接しない、多分に遊戯的な敬語の用法である。「奴」の意義を家持同様女郎も知っていて、その共通の教養のもとに可能な敬語の自在さである。¹⁴⁾

敬語の使用が遊戯性を支えているわけではない。一般の敬語の用い方と逆転しているために、遊戯性が生じている。「君」や「わけ」という言葉を用いていることは、この敬語の使用とかわつてNを含む贈答歌は、大伴家持と紀女郎の「共通の教養」¹⁵⁾に基づいて交わされている。

井手至氏は、「戯奴」という表記について、紀女郎は、大伴田主と石川女郎の「遊士」問答(2・一二六～一二七番歌)を念頭に置いて、「その『遊士』の文字を振つて『戯奴』としたのではなかつたらうか」と述べている。用字の意味を歌のやりとりをしている人同士が理解していることから、遊戯性を生み出すことができるようになっていく。

以上のように、遊戯性のある贈答の場合には、宴席などの場で演じられることで遊戯性が生まれるものと、歌のやりとりをする二人の「共通の教養」をもとにして、言葉の上での遊戯性を生み出すものがある。

(5) 旅の場合

旅の歌の特徴について、伊藤博氏は次のように述べられている。

古代の行路をなげく歌には鉄則的ともいふべき発想ないし型式がある。「家」故郷」と「旅」異郷」とを対比して行路のなごしみを述べるというのがそれで、これは行路死人歌をいたむ歌においてとくにいちじるしい。

この説は、旅の歌全般について考えていく際に、重要な指摘である。これをふまえて、旅の場合の歌を検討すると、敬語を用いている男性は、旅に出ており、敬意の対象となる女性は、家にいることが分かる。

君が行く 海辺の宿に 霧立たば 我が立ち嘆く 息と知りませ

○秋さらば 相見むものを なにしかも 霧に立つべく 嘆きし
まさむ「奈気伎之麻佐牟」 (15・三五八〇、「贈答」)

この二首は、遣新羅使人歌群（・三五七八―三七二番歌）の冒頭部分にある歌である。旅に出発する時、妻から贈られた歌とそれに夫が答えた歌（○の歌）ととらえられる。旅の途中で家に残された人々を思うという歌ではないが、旅に出してしまった後のことを想定して詠まれている。

P：海原の 忍き道を 烏伝ひ い漕ぎ渡りて あり巡り 我が
来るまでに 平けく 親はいまさね つつみなく 妻は待た
せと「都麻波麻多世等」： (20・四四〇八、大伴家持)

Pは防人の立場になって詠んでいるので、家持の置かれた状況は旅の途中ではない。この敬語について『日本古典文学全集 萬葉集』（小学館）では、

夫から妻に対して敬語が用いられる例もなくはないが、一般に少ない。音数の都合か。ここは家持が防人の身になって詠んでいるので丁寧な表現となったと考えることもできる。

と述べられている。「家持が防人の身になって詠んでいるので丁寧な表現となった」とするならば、他人の立場になって詠まれる歌に、敬語が用いられているかどうかを検討する必要がある。たとえば笠金村が紀伊国の行幸の時に「娘子」に頼まれて作った歌（4・五四三―五四五番歌）は、女性の立場で詠まれている。だがこれには頼まれた「娘子」の夫に対して敬語は用いていない。やはりPも旅に出た男性が家に残された人に対する敬語として扱うべきである。

旅の場合における敬語は、旅に出た男性が、家に残された人に対する感謝の思いを述べるものであると思われる。

四

ここまで、男性から女性に対しての敬語について述べてきた。作者未詳歌があるので、はっきりしたことはいいないが、男性から女性に対しての敬語は、ほぼ平城京遷都以後の歌に用いられている、

といえる。また対象となる女性は、敬語を用いている男性と心理的、または空間的に離れている存在であるといえる。それぞれの場合に ついて述べると、次のようになる。

(1) 対象が天皇または太上天皇の場合では、敬語を用いている男性との身分がかけ離れた存在である。(2) 対象が死者の場合では、歌の中に、「家離りいます」(5・七九四、山上憶良)とあるように、生活している家から離れていく存在として描かれている。

(3) 対象が伝説上の人物の場合では、遠い昔の出来事の中に出てくる女性であるから、敬語を用いる男性とは、時間の隔たりがある。

(4) 遊戯性のある贈答の場合では、対象である女性は自分自身ではない人物を演じている。そのことで、たとえ親しい人物であっても、男性との距離感ができてくると思われる。(5) 旅の場合では、家にいる女性と旅に出ている男性との距離感によって、敬語が用いられていると考えられる。

中臣宅守の歌における敬語は、男性から女性に対しての敬語について述べてきた項目のどこに位置づけられるだろうか。それらは、(5) 旅の場合に当てはまるといえる。中臣宅守が越前国に配流されているということもあるが、中臣宅守の歌の中に、次のように「旅」という言葉が詠まれていることも一つの裏づけになる。

旅といへば 言にそ易き すべてもなく 苦しき旅も 言にまさ

めやも

(15・三七六三、中臣宅守)

中臣宅守の歌における敬語は、妻であり、自らの理解者である狭野弟上娘子に対する中臣宅守の感謝であろう。自らの帰りを待ち続ける狭野弟上娘子は、旅に出た男性の無事を祈る妻である。また中臣宅守は配流され、帰ってくる可能性の低い旅に出ている。そのような状況にある中臣宅守が、妻である狭野弟上娘子に持つ敬意は、他の旅の場合以上であっただろう。Aの歌で、「思ほしめす」という二重敬語を用いたのは、そのこととかかわっていると思う。

注

① 皇子の例は、2・二六七番歌(柿本人麻呂)、2・一九九番歌(柿本人麻呂)、13・三三三番歌(挽歌)で、天皇の例は、1・二九番歌(柿本人麻呂)、2・一六二番歌(持統天皇)、18・四〇九四番歌(大伴家持)、19・四二六番歌(大伴家持)である。

② 藤原芳男氏「中臣宅守茅上娘子贈答歌」、『萬葉』38号、昭和36年1月。

③ 金田一京助氏「萬葉集の敬語」(『萬葉集大成 第六卷 言語篇』、平凡社、昭和30年5月)。

④ 『新編日本古典文学全集 萬葉集』(小学館)では、尊敬の助動詞「す」について、「時に語調を整えるのが目的のものもある」(1・一番歌、「菜摘ます兒」の注)と述べられている。この注についても、音数律の関係から敬語の使用を考えている。

⑤ 澤瀉久孝氏「萬葉集に於ける男女の言葉」、『萬葉集新釋 下巻』(星野書店、昭和6年3月) 所収。

⑥ 伊藤博氏「中臣宅守と敬語、『日本語と日本文学』28号、平成11年3月。

⑦ 『万葉集』の歌における男性から女性に対しての敬語の用例を、項目別に以下に示しておく。

(1) 対象が天皇または太上天皇の場合(四首)

1・三六(柿本人麻呂)、1・三八(柿本人麻呂)、3・三三五(柿本人麻呂)、18・四〇六四(大伴家持)

(2) 対象が死者の場合(六首)

2・一九六(柿本人麻呂)、2・二二〇(柿本人麻呂)、2・二二三(柿本人麻呂)、3・四七一(大伴家持)、5・七九四(山上憶良)、7・一四〇九(挽歌)

(3) 対象が伝説上の人物の場合(十八首)

5・八〇四(山上憶良)、5・八二三(山上憶良)、5・八一四(山上憶良)、5・八五五(作者未詳)、5・八五六(作者未詳)、5・八六九(山上憶良)、5・八七四(作者未詳)、9・一七三八(虫麻呂歌集)
9・一七四二(虫麻呂歌集)、9・一八〇七(虫麻呂歌集)、9・一八〇八(虫麻呂歌集)、10・二〇〇六(人麻呂歌集)、10・二〇八一(夕夕)、17・三九六九(大伴家持) 17・四〇二一(大伴家持)、18・四一二五(大伴家持)、18・四二二六(大伴家持)、19・四二二一(大伴家持)

(4) 遊戯性のある贈答の場合(二十八首)

1・一(雄略天皇)、3・三六二(山部赤人)、3・三六三(山部赤人)、4・六三六(湯原王)、4・六五〇(大伴三依)、4・六五四(大伴駿河麻呂)、4・六七〇(湯原王)、4・七〇〇(大伴家持)、4・七七九(大伴家持)、8・一四六二(大伴家持)、8・一五〇七(大伴家持)、8・一五六三(大伴家持)、8・一六一八(湯原王)、9・一六九二(人

麻呂歌集)、9・一七二六(丹比真人)、10・二三四八(寄雪)、11・二六四四(古歌集)、11・二五五七(正述心緒)、11・二六九〇(寄物陳思)、12・二九一七(正述心緒)、12・三〇一三(寄物陳思)、13・三二八九(相聞)、13・三二九九(相聞)、13・三三二〇(問答)、14・三三六九(相模国歌)、14・三四三九(雑歌)、14・三四四〇(雑歌)、14・三四八四(相聞)

(5) 旅の場合(十七首)

5・八九〇(山上憶良)、12・三二四七(羈旅発思)、15・三五八一(贈答)、15・三七三六(中臣宅守)、15・三七六四(中臣宅守)、15・三七六五(中臣宅守)、15・三七六六(中臣宅守)、17・三九九九(大伴池主)、17・三九六二(大伴家持)、17・三九七八(大伴家持)、18・四一〇六(大伴家持)、19・四二六九(大伴家持)、20・四三二六(遠江国防人)、20・四三三二(駿河国防人)、20・四三七六(下野国防人)、20・四三八六(下総国防人)、20・四四〇八(大伴家持)、

⑧ 注⑤の論文。

⑨ 小島憲之氏「遊仙窟の投げた影」、『上代日本文学与中国文学 中』(塙書房、昭和39年3月)所収。

⑩ 神田秀夫氏「『娘子』と『郎女』——昭和二五年六月号の続き——」、『国語と国文学』29巻6号、昭和27年6月。

⑪ 橋本四郎氏「習問歌人佐伯赤麻呂と娘子の歌」、『橋本四郎論文集 万葉集編』(角川書店、昭和61年12月)所収。

⑫ 注⑤と同じ。

⑬ 芳賀紀雄氏「万葉集における『報』と『和』の問題——詩題・書簡との関連をめぐって——」(『吉井巖先生古稀記念論集 日本古典の眺望』、桜楓社、平成3年5月)。

⑭ 内田賢徳氏「万葉集——自敬表現・敬語の自在——」、『国文学解釈と教材

の研究』39巻10号、平成6年9月。

- ⑮ 注⑭の内田氏の論文の注6に「今ここに述べえないが、漢文による書簡の敬語表現に旅人、憶良を始め習熟していたことは、敬語の自在さに影響したと考えられる」とある。

- ⑯ 井手至氏「紀郎女の諧謔的技巧―『戯奴』をめぐる―」、『萬葉』40号、昭和36年7月。

- ⑰ 伊藤博氏「家と旅」、『萬葉集の表現と方法 下 古代和歌史研究6』（塙書房、昭和51年10月）所収。